
花浅葱

秋桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花浅葱

【Nコード】

N8065Q

【作者名】

秋桜

【あらすじ】

新撰組一番隊組長・沖田総司を中心に据えた、新選組の日常小話。

隊士徵募（前書き）

新撰組を題材にしていますが、史実とは異なる点が多数あります。あくまで新撰組をモチーフとしたフィクションです。ご了承ください。

また時系列順が入れ替わる可能性もあります。

隊士徵募

何やら道場の入口が騒がしい。

裏手で汚れ物を洗濯していた賢之助は、その喧騒に耳を傾けながら、洗い終えた手拭いやら道着やらを物干し縄にひっかけた。

もう夕暮れ時だから、これは帰るまでに乾くはずもないが、干さないまま放置しておくよりはましな筈だ。

ぱん、と布を伸ばして整えたのち、賢之助は濡れた手を拭いながら道場の表へと回った。

結構のんびりと洗濯をしていたのにも係らず、喧騒は大きくなることがない代わりに、静まることもない。

何か厄介ごとが生じていたのならば、状況を把握していないことで面倒なことに巻き込まれるかもしれないので、取りあえず様子を見に行くのが賢明かと判じたのだ。

人だかりができている玄関に行ってみれば、そこには見慣れない顔がふたつあった。道場の人間が、その見知らぬ彼らを囲むようにしている。

ざわざわと聞こえてくる声を、賢之助はつきり道場の門下生とその来客が交わしている言葉なのだと思っていたのだが、近づくとそれが勘違いだったと気づいた。

来訪者を遠巻きにして、門下生たちは隣に立った仲間たちと何やら囁き合っているだけだ。

「おい、何があつたんだ？」

近くにいた顔に尋ねるがどうも要領を得ず、業を煮やした賢之助は人垣をかき分けて前へと進み出た。

そこでようやく、賢之助は来訪者が何者か理解し、同時に門下生たちが遠巻きにするばかりだった理由も察する。

ふたりは、目にも鮮やかな浅葱色の羽織を纏っていた——彼らは壬生浪士だ。

壬生浪士の悪行は京中に知れ渡っており、そしてその悪評を知る者で、彼らと積極的に係りたいと思う人間はそう多くはないはずだ。反幕府勢力の取り締まりを行っているというが、みすばらしい身なりで京を練り歩き、粗雑な彼らのことを、誰もが忌み嫌っている。そういえば最近彼らは、会津藩より賜った「新撰組」という名に改めていると聞いていた。浅葱という奇抜な色をした羽織もそれに合わせて詔えた、のだと聞く。

趣味が悪いとは思うが、見た目は以前ほどみすばらしくはない。というよりも、目の前に立っている二人の隊士に限って言えば、若さと風貌も相まって、なかなか凛々しくみえた。奇抜な浅葱色も妙に様になっている。

「新撰組の方々が、当道場に何か御用か」

賢之助の言葉に、新選組のひとりがくつくつと笑った。

目元と口元が柔らかく緩み、見るものを無条件でほつとさせる雰囲気を出す。正直、あまり新撰組隊士らしく見えない。

だが連れのほうは表情一つ変えず、得体が知れない感じがおり、いかにもうわさに聞く新撰組らしいと納得するものがあつた。

「僕たちをその名で呼んだのは、君が初めてだ。行く先々で、壬生浪壬生浪、と散々言われてきたものだから、いやなんだが嬉しくなつて思わず笑っちゃったよ。失礼した」

理解に苦しむが、新撰組と呼んだ、たったそれだけのことがこの隊士から笑いを引き出したらしい。

「その羽織を見れば、一目瞭然かと。ところで重ねてお聞きするが、当道場に何用か」

「ああ、隊士を募集しているんだ。そのためにこうして道場を回つて、隊士の徴募を行っている」

面倒くさいことになったな、と賢之助は内心で舌打ちをした。できることならば早々にお引き取り願いたいところだが、賢之助にそんな権限はない。

そうこうしているうちに、数人の門下生が道場の奥へと駆けてい

った——権限のある者のところへ、指示を仰ぎに行つたのだらう。

やがて、奥のほうからどすどすと、荒っぽい足音が聞こえてきた。足音の主を察した賢之助はすつと身を引き、門下生らの中に埋もれるような位置へと移動する。顔を合わせたい相手ではないし、賢之助が彼らの対応をしていたと知れば、恐らく難癖をつけられるだろうと、過去の経験から察したからだ。

「私は当道場の師範代、小山田という。隊士の徴募に来たというのか」

熊のような風貌と体格の小山田は、背丈こそ高いが隆々とした体格ではない二人の新撰組隊士の姿に、小馬鹿にしたような笑みを浮かべた。

「まあ、当道場から壬生浪……いや失礼、新選組に入りたいと言うものがいるかもしれぬ。だがまず師範代の私自ら、あなた方の腕前が如何ほどのものか確かめさせて頂きたい」

「ごもつともです」

妙に居丈高な態度だが、新選組隊士はさして気にした様子もなく、小山田が顎で促すままに履物を脱ぎ、道場へと案内された。

荒くれ者の集まりだといわれている新選組に対しても、普段と変わらぬ様子を見せる師範代の姿に、門下生たちは尊敬の眼差しをむけているようだが、賢之助はひとり冷めている。

彼があんな態度をとるのは、この隊士たちが歳若く、自分よりも体格において劣っている——と思っているからだ。

そろそろと門下生が道場に向かう列の最後尾についた賢之助は、人山の後ろの方から師範代と新撰組の立ち合いを見学する。背丈が高い方なので、十分ふたりの立ち合いを視界に収めることはできた。小山田は相変わらず偉そうな様子で、門下生がいそいそと持ってきた竹刀を受け取る。

「竹刀でよろしいか」

「僕は木刀でも、真剣でもいいんですけどねえ」

君、それ貸して——と近くにいた門下生の竹刀を奪ったよく笑う

隊士が、それを肩に担いだ。

肩の凝りを解すように竹刀で数度叩き、小山田が不愉快そうに眉を寄せながら構えを取ったのを確認してから、隊士もまた竹刀を構えた。

「そつえば聞いていなかった。名は？」

「——沖田」

その瞬間、沖田と名乗った男の雰囲気が変わる。

先程までは日向で昼寝をしている猫のような風体だったのに、いまはまるで山猫だ。

身をわずかに前に倒して刀を構える様といい、鋭くなった眼光といい、獲物に狙いを定めている獣そのものだった。

構えた刀はわずかに右に寄っている。

あの構え方だと左に隙がある、と誰かが囁くのが聞こえたが、賢之助は胸の内、それは違うと返答した。

隙など、沖田という男には少しもない。隙に見えるそこに打ち込んだところで、すぐにそれは薙ぎ払われるだろう。少し賢ければ、あんなところに打ち込んだりはしないはずだ。

だが小山田はそこに竹刀を打ち込む——策があつてのことではなく、それを隙だと信じ込んだことだというのは、沖田によって竹刀を受けられたときの表情でよくわかった。

パン、と音を立てて小山田の竹刀を受けた沖田は、すぐに間合いを取る。

焦つたようにその間合いに、小山田が踏み込んできた。

く、と沖田の唇がたゆんだ。

小山田のことを、相手にもならないと判断したのが分かるような笑みだった。だが沖田が浮かべたその笑みに気づいたものが、果たしてどれくらい居ただろう。

沖田の唇に笑みを浮かんだのを見た、と賢之助が思った次の瞬間に、沖田の右足が大きく踏み出された。だん、と足裏が床を叩く音が、道場に響き渡る。

その音の余韻が消えないうちに、小山田の身体が壁に叩きつけられる音が重なった。

沖田の突きが、小山田の身体を吹っ飛ばしたのだ。

「吹っ飛ばされ、た……？」

啞然とした声を誰がもらしたのかわからない。

壁に背を打ち付け、床にずりりと崩れ落ちた小山田自身も、自分の身に何が起こしたのかをよく理解していないようだった。

突かれた胸元が相当痛むのか脂汗を流しているその表情は、ただ呆然としている。

そんな小山田に一礼をした沖田は、礼の言葉と共に、門下生に借りていた竹刀を返した。

「どうもありがとう」

「い、いえ……」

先程まで刀を振るっていた男と、にこりと笑むこの男が同一人物だとは思えず、道場中の人間は間抜けに口を開けていた。

「では今日はこれで失礼します。もしも新選組に入る意志があるようなら、壬生寺ちかくの八木邸まで」

そんな門下生の間を縫って、沖田は連れの男と一緒に道場から去っていく。小山田は立ち上がることもできずに、彼らの背中を見つめるばかりだ。

賢之助もまた浅葱の羽織が視界から消えるまでその場から動けなかったが、すぐに我に返って、道場の端に転がっていた木刀を二本握りしめると彼らを追った。

門下生たちは当分動けないだろうし、全員動けるような状態になれば小山田を宥めなければならぬはずだ。

だから今のうちに――

「あの！」

道場の前の道を歩く沖田たちを、大きな声で呼び止める。

「あの……自分はあまり稽古をつけてもらえておらず、到底沖田さんの相手にはならないと思います。でも、自分と一度手合せ願いた

い」

賢之助の言葉に、沖田が緩く首を傾げた。

幼げな仕草からは、やはり先程の山猫のような姿は想像できない。

「……君、さっきのあれを見ていて、そういうことを言うんだ？」

木刀を持つてきちゃうんだ？」

竹刀よりも木刀の方が、殺傷力がある。手練れが木刀で本気を出せば、人だってたやすく殺せるのだ。

それを理解しているのか、という沖田に、賢之助はただ頷くことで答えた。

すると沖田は、その顔を不意に伏せた。

ふる、と肩がわずかに震えたのを見た賢之助は、自分が彼を不快にさせたのかと不安を覚える。

稽古もろくにすることがない者が、木刀で手合せを願うという不遜さに怒りを覚え、震えたのかと思ったのだ。

だが沖田の口からこぼれた声に、自分が勘違いをしていたとすぐに気づく。

沖田はひどく面白そうに笑っていた。

最初はくすくすという感じだったが、時期にけらけらという風になり、最後には腹を抱えて笑い転げる。

困惑して連れの新選組隊士の方を見ると、彼もまた無表情だった顔に少しの困惑をのせていた。

「総司。手合せする気があるのか、ないのか」

「あつはははは！ あるある。だから、斎藤。ちょっと待っててくれるかな」

「それは構わないが、とりあえずその馬鹿笑いをおさめる。失礼だろっ」

「そうだね、ごめんごめん……別に馬鹿にしたわけじゃないからね、ええと」

浮かんだ笑い涙を指で拭いながら、沖田が賢之助の顔を見る。名前を問われているのだとすぐに気づき、少しの躊躇の後に、姓名を

名乗った。

「小山田賢之助」

「小山田……ってことは、さっきの師範代の身内？」

「あれは兄です。念のために言っておきますが、手合せを申し込んだ理由は、敵討ちとかではありません」

そんな気持ちは欠片だつてない。賢之助はあの兄を疎んじている。長男だからというだけで、弟である自分を手下のように扱うところも、器がちいさいくせに自分を大きく見せたがるところも、窮地に立つと無駄に大きな声を出して誰かに責任転嫁するところも、全てが疎ましい。

そして何が一番嫌かというと、賢之助の太刀筋が悪くないと知るやいなや、門下生たちに手をまわして、賢之助の稽古が立ち行かぬようにした姑息さだ。

弟には何一つ勝られたくないという気持ちは、わからないでもない。だがそのために自分の腕を上げる努力をせずに相手を貶める手段を選んだ兄の性格を、賢之助は嫌悪していた。

「先程も言ったように、訳あって自分はなかなか稽古をつけてもらえない状況にあります。なので、この機会に稽古までは望みませんが、手合せだけでもどうか」

「うん、いいよ。本気で打ちこんでおいで。そうじゃないとつままないから」

賢之助の持つている木刀を一本受け取り、沖田はそれを構えた。

斎藤と呼ばれた男は道の端に寄り、壁に背を預けている。無表情に見えるその顔だが、瞳がわずかに笑んでいるところを見ると、どうやらこの事態を彼も楽しんでいるようだ。

沖田と向かい合った賢之助だったが、すぐに打ち込むような真似はしなかった。

構えに生じている左の隙は、本当の隙でない。小山田との立ち合いの際に見たが、彼は驚くほど素早く、そして滑らかに刀を操る――よほどの事がない限り、そこに打ち込んだって一本をとれない。

それを理解しているから、賢之助は打ち込むような愚かしい真似をせずに、沖田に本当の隙が生まれるのをひたすら待った。

こうして待っていると焦りが胸のうちに湧き上がってくるし、続く緊張感に息苦しさを覚えたりもするが、我慢強さには定評がある賢之助はそれらに耐え続ける。

わざとらしく作られる隙に食らいつきそうになるも、沖田の僅かに動いた足の動きからそれは罠だと気づいて踏みとどまった。

「大したもんだ」

沖田の唇が、笑みを刻む。

それは小山田に向けて浮かべた嘲笑にも似たものとは違い、ひどく愉快そうな笑みだった。

ざ、と沖田の足が地を擦り、打ち込んでくる。

驚くほどに素早い動きだったが、手加減されているのか打ち込みが甘く、かろうじて木刀を受けることができた。

受けたそれを腕の力で弾いたときに、僅かに開いた沖田の胸元。それを誘いとみるか、隙とみるか……判断は一瞬で下さなければならぬ。

賢之助は手首を返して、そこへ木刀を叩き込んだ。

パン、と乾いた音が響き——賢之助の木刀は、驚くほど素早く動いた沖田の木刀によって撥ね飛ばされる。

鋭い打ち込みに手首どころか脳天まで痺れた。

手から離れていった賢之助の木刀は、青空にくるくると舞って、そしてからんと地面に落ちる。

開いた胸元は、やはり作られた隙だったようだ。

額にびっしりと浮いた汗を拭った賢之助は、沖田に頭を下げた。

「ありがとうございました」

「ありがとうございました——ねえ君さ、さっきなんで打ち込んだきたの」

問いかけの意味が分からずに眉を寄せると、沖田は自らの胸を緩く握った拳でとんとんと叩く。

「ここ、わざと作った隙だつて分かつてたんじゃないの？　そこに打ち込んで来たら弾かれるのは当然だよな」

「ああ……でもそこに打ち込まずに身体を引いたら、面を食らうような気がしたので、それだったら小手を取られる方がましだと判断しました。もしこれが真剣だったら、脳をやられたら終わりですから」

地面に転がった木刀を斎藤が拾い、沖田の持っていたものと共に、賢之助に渡してくれた。

受け取ったものの手がしびれていて、取り落としそうになる。腕に抱え込むようにして、木刀を抱え込んだ。

この力で腕に打ち込まれていたら、骨のひとつは逝っただろう。

「ねえ、君さ、人を斬ったことはある？」

「ないです」

「真剣での斬り合いは」

「それもないです。竹刀や木刀での打ち合いも、あまり数をこなしていません。先程も言ったように、小山田がそれを許さないの」

「その割には迷いが無い、いい太刀筋だったなあ。動体視力も半端なく良いし、我慢強さもある。ねえ、斎藤も思わない？」

「そうだな」

沖田と斎藤が夕日を背にして、ふたり並んで立つ。

青いはずのダンダラ羽織が、夕日の色に染まって赤く見えた。

朱の色に染まった沖田と斎藤が、瞳だけを細めて笑う。

「賢之助だっけ？　君さ、うちにおいでよ。存分に稽古ができる環境だよ。腕だつてすぐに上達する——なんせ生死にかかっているからね」

■ ■

それから数日後のこと。

賢之助が僅かばかりの荷物とともにふらりと壬生寺に立ち寄ると、

そこに知った顔がいた。

子供を数人まとわりつかせながら、前に見た時と変わらず穏やかな笑みを浮かべている。

この人はこんなところで何をしているんだろう、と考えながら立ち尽くしていると、沖田がちらりと視線を投げかけてきた。驚いた様子はなく、どうやらとつくに賢之助の気配を察していたらしい。

「やっぱり来たね」

「はい」

そんなあなたは一体何をしているんですか？ と口から出そうになったが、何とかその言葉を飲み込んだ。

ひざの上に乗っていたり、背中に乗っかっていたりした子供の頭を撫でながら、沖田は彼らにもう帰るようにと告げる。

もうあたりは夕焼け色に染まっていた。

子供たちは大した駄々もこねず、おとなしく沖田に手を振ってそれぞれ散っていく。

それに答えるように手を振りかえしながら、沖田が賢之助に尋ねてきた。

「それ、どうしたの？」

『それ』とは、賢之助の額に巻かれている包帯のことだ。

問われた賢之助はひょいと肩を竦め、事情を説明する。

「家を出るときにかなり揉めまして」

暴君気質の兄の気をそらす役割を担っていた賢之助を手放すことを、両親も兄も嫌がったのだ。

それだけではなく、身内から壬生浪士とさげすまれている新撰組に入る者が出るなんて不名誉だ、という理由もあったのだが、そこらは口外しない。

「ふうん。あの師範代にでも斬りつけられた？ それとも父君に徳利でも投げつけられたとか？」

「いいえ。誰かに負わされた傷ではなく、自分の刀でこう、米神あたりからぐいっと頭部にかけて搔っ切りしました」

「へえ、何でもまたそんなことを？」

予想外の答えだったらしく、好奇心に満ちた視線が賢之助の方へ向けられた。

「血を流さないと覚悟が伝わらない雰囲気だったので。腕や胸とか腹でもよかつたんですけど、それだと刀を振るうのに不自由しそうだから、あまり支障がなさそうな頭部にしました。頭部はさほど大きくない傷でも出血が多いと聞いていたので」

視覚的效果は絶大で、血まみれになった賢之助はそれ以上引き止められることはなかった。

出ていくにあたって、人斬り集団に加わるのならば家族の縁は切ってもらう、と言われたが、それは賢之助にとって願ったりでもある。

沖田はその話を聞いて、また腹を抱えて笑っていた。

よく笑う男だ。だがこんな隊士はそう多くはないのだろう。

ここに来る途中で何人か巡察中の新選組隊士にあつたのだが、誰もが厳しい表情をしていた。言葉を選ばなければ、人相が悪い。

だが、その一員になることに不安はあるが、迷いなどはなかった。道場で沖田の太刀裁きを見たとき、いろいろなことを諦め、冷めた目で世の中を見ていた賢之助のなかに何か変化が生じていた。

それが何かはよくわからないが、確かなことはこの男の傍らで剣を振るい、認められたいという感情があるということだけ。

將軍を護るとか、幕府を護るとか、そういう難しいことは正直よくわからないが、『誠』を掲げる新撰組に身を置きたいという気持ちに偽りはなかった。

強さに対する憧れ、というものに突き動かされているのかもしれない。

「さてと。荷物を抱えているってことは、まだ屯所には行っていないだね。僕も帰るから、一緒に行こうか」

まだ笑いが収まらないのか、喉をひくつかせながら沖田は賢之助の前に立って歩き出した。

そして、何でもない事のように言う。

「実は君がここに来るだろうって確証があったから、土方さんにはもう言つてあるんだ。君は新撰組一番隊に入つてもらふよ」

土方、とは新撰組副長の、土方歳三のことだろうか。沖田は妙に気安くその名前を呼んだ。いや、名前の呼び方云々ではなく、彼は隊編成に対して口出しをする権限を持っているような口調だ。

怪訝そうに沖田の背中を見つめると、彼は首だけ賢之助の方を振り返った。口元には笑みが浮かんでいるが、妙に性質が悪い感じに歪められている。

「改めてよろしく。僕は新撰組一番隊組長、沖田総司です」

——沖田という男が、あの一番隊組長である沖田総司だと何故か考えもしていなかった賢之助は絶句し、そして言葉の意味を理解した瞬間に絶叫していた。

一 番組巡察（前書き）

斬り合いシーンがあります。

一番組巡察

本日の一番隊の行動予定表は、屯所内の清掃の後に、武術訓練、そして夜間巡察となっていた。

剣、槍、棒、柔術と、行われる武術訓練は様々だが、やはり刀を腰に帯びることが多いため、訓練もおのずと剣術が中心となる。

指導するのは主に組長クラスの幹部だ。

指導の仕方や内容は本人に一任されているらしく、同じ剣術を習うにしても指導者によって内容が全く異なった。

——そんな中、沖田の指導は非常に評判高い。正確に言うと、悪評が高い。

「おわ、った……」

終了の合図と共に、道場内にいた一番隊士全員が床に崩れ落ちた。手足ががくがくと震えていて、誰も立つことができない。終了の合図まで木刀を持って立ち、打ち合いをしていたことが信じられなかった。

沖田の指導はとにかく厳しいのだ。罵声が飛び、木刀が唸る。そして隊士が吹っ飛ぶこともしょっちゅうだし、怪我人が絶えない。

つい先日入ってきたばかりの隊士たちが、床に沈み込んだままぼそぼそと何事かを呟いている。

「俺、本気で殺されるかと思っ……」

「ここだけの話、俺は泣きそうだっ……」

「稽古で死を感じたのって、ここが初めてで……」

誰もかれも、語尾が儂く消えていく。

這うようにして道場から出て何とか中庭にたどり着いた隊士たちは、そこで汗を拭い、何とか立てるようになったものは井戸水を汲み上げて頭からかぶったりした。

入隊して時間が経っている隊士たちは回復も早く、自分たちが落ち着くと途中で力尽きている新人たちを引きずるようにして縁側に

連れ出し、水に浸した手拭いを額においてやる。

一度、親切心と冗談で濡れた手拭いを顔面にひたりと貼り付けたところ、それを取り払う力すら残っていなかったらしく窒息死しかけた隊士が出たので、それ以後濡れた手拭いは額、ないし首あたりに乗せるようにと厳命されていた。

「新人、大丈夫かー」

「今日も組長、容赦なかったもんな。俺、土方副長は表の鬼で、沖田組長が裏の鬼だと思ってる」

「でもさすが組長だよ。あんだけ私たちと打ち合っても、けろっとしてるし」

諸肌を脱ぎながらそんなことを言った隊士が、ふと何かに気づいたように顔を上げる。

みながその視線を追うと、そこには手拭いを片手にふらふらと歩いている沖田の姿があった。

最初に沖田の姿に気づいた隊士が、彼に声をかける。

「お疲れ様です、沖田組長。菓子があるのであとから一緒に如何ですか？ 甘いもの好きですよね」

ぎよつとしたように目を剥いたのは、新人隊士たちだ。

先程まで自分たちをしごいていた鬼を茶に誘うその神経を疑う、と言わんばかりの顔をしている。

そんな新人隊士をしり目に、ぜひ自分も一緒させてください、と先程までしごかれていた隊士たちが次々と挙手した。

世辞ではなく、本当に一緒に沖田と茶を飲みたいのだとわかるような雰囲気、新人隊士が不思議な生き物を見るような目で沖田と先輩隊士たちを交互に見つめる。

「それじゃあ、僕の部屋にもいくつか菓子があるから、それも持ってくるよ。みんなで食べようか」

先程鬼のような形相で怒鳴っていた組長は、しかしいまは穏やかな表情を浮かべていた。

そして混乱している新人隊士の前にしゃがみ込んだ沖田は、自分

たちが組長の前でだらしなく横たわったままだったという事実に気づいて慌てて飛び起きようとした彼らを手で押しとどめ、小首を傾げながら話しかけた。

「君たちも食べる？　甘いものを食べると、疲労が回復するって斎藤が言ってたよ」

斎藤とは、三番隊組長である斎藤一のことなのだろう。

「あ、はい……あ、ありがとうございます、ます」

「じゃあちよつと取ってくるね」

沖田がその場を立ち去ってしばらく後、小姓が人数分の茶を持ってきた。

どうやら菓子を取りにいきしな、沖田が小姓に茶を淹れるよう頼んだらしい。

先に茶を飲んでいるといい、という伝言までしている周到さだ。

「あの……沖田組長って、」

「ん？」

両手で抱えるようにして湯呑を持っていた戸惑いがちに新人隊士が口を開いたが、なんと言っているのか決めあぐねているのか、口をもごもごとさせる。

「聞きたいことあるなら、組長が戻ってくる前の方がよくないか」

「ええと、沖田組長って……何なんですか？」

しばらくの沈黙の後、場がどつと沸いた。

「懐かしい質問だな、それ」

「俺も言ってたわ、最初の頃」

「沖田組長の人となりってのは、頭で考えるもんじゃないからなあ」

「考えるんじゃないと、感覚で掴まない」と

そして最後に、沖田に菓子があると声をかけた隊士が言った。

「まあ時期に何となくわかるさ。早ければ今夜にでも」

■ ■

深夜の巡察は初めてだという新人隊士は、夜空を見上げて時折ため息をついた。

つられるようにして次々に他の隊士も空を見上げ、そこに月の姿がないことを確認する。

今夜は新月だ——こんな夜は辻斬りも横行すれば、不逞浪士も闇にまぎれて暗躍することが多かった。

先程から、気配を消してこそそそとうごめいている人影の姿を、何度か見かけている。

だが人の気配に気づいていないはずのない沖田は、そちらへ視線をちらりと投げかけるものの、追うような真似はしなかった。

時折腰に帯びている愛刀の柄を軽く叩きながら、ひたひたと歩を進める。

「探られてるよねえ」

沖田が囁くような声音で、自分の斜め後ろを歩く小山田という隊士に声をかけた。

「ですね。どちらでしょう」

何やらよからぬ話し合いを行っている不逞浪士がいて、先程からちよろちよるとしているのは所謂見張り役なのか。

目障りな新撰組に一矢報いようという輩なのか。

今の時点では判別しかねた。

「監察からは、いまのところ不逞浪士たちに大きな動きはないと聞いているし、僕たちに喧嘩を売りたい連中じゃないかな」

「今日の巡察は七人ですが、襲ってくると思いますか」

「相手の人数次第だろう。でもまあ、逆の立場だったとしたら、僕は間違いなく今夜決行するね。新月の夜で視界が利かない——まあそれはお互い様だけど。それに今夜の一番組は新人隊士が二人いる。さつきから落ち着きなくきよるきよるしているんだから、相手もそれが新人だと察してるんじゃないかな」

「でも新撰組一番隊ですよ。組長が沖田総司の」

新撰組の中でも特に手練れと言われている組長は、沖田総司、斎

藤一、永倉新八の三名だ。

小山田は、自分ならばこの三名が組長を務める隊のときに襲撃するなどできない、と言った。

「馬鹿だなあ。だからこそ名が上がると考えるもんじゃないか」

「あ、そうか」

虚を突かれたような顔をする小山田の顔を横目で見て笑いながら、沖田は刀をすらりと抜く。

目の前の路地から、五人の不逞浪士が現れたのだ。誰もが抜身の刀を構えている。

「やっぱり闇討ちか。新月の夜は多いんだよね——とりあえず一人だけ生かしておけばいいかな」

「拷問して吐かせるなら、二人はいた方がいいんじゃないやありませんか。色々使えますよ」

「自分は逆に、全員始末してもいいかと思います。大した情報も持っていないでしょうし」

沖田の独り言のような言葉に、数人の隊士が言葉を返ししながら、刀を抜く。

その姿に新人隊士も慌てて刀を抜こうとしたが、動揺しているのか鞘に引っかかってうまくいかないようだ。

耳障りな音を立てて、人の倍の時間をかけて抜刀する。

そのころ沖田はすでに、不逞浪士へ斬りかかっていた。

一太刀でひとりを斬り伏せると、敵は血しぶきをあげて路上へ転がる。

血の匂いが辺り一面に立ち上った。

「……う、」

斬り合いを初めて見る新人隊士は血の匂いに完全に飲まれ、刀を抜いて構えているものの、とても斬り合いができる状態ではない。身の程を弁え、路地の隅に身を寄せて他の隊士の邪魔にならないようにするのが精一杯のようだ。

そのときだ。

不逞浪士の中でも特に手練れのが、隊士のひとり斬り捨てた。そして開いた路を駆けて、一直線に新人隊士の方へと切りかかってきた。

沖田は別の浪士の相手をしている。

別の隊士にしても、浪士たちと斬り合っていたり、また彼らの退路を断つように立っていたりとしていて、新人隊士の方へ回れる人手はなかった。

自らの身は、自らで守らなければならない。

そんなことは承知の上で新撰組に身を置いていたはずなのに、そして最も厳しいと言われる一番隊の稽古にしろついでについていたはずなのに、実際こうして斬り合いの現場に立った彼らは、身動き一つ取れなかった。

――斬られる！

思わず目を閉じかけたその瞬間、沖田の怒声が飛んだ。

「踏み込め！」

それは昼間の稽古で、沖田が彼らに向かって何度も叫んだ言葉だった。

踏み込め、腕で斬ろうとするな、身体ごと飛び込んで斬れ、引くな、躊躇うな、そうすれば逆に斬られる。

何度も怒鳴りつけられた身体が沖田の声に反応し、無意識に動いた。

一人の新人隊士が刀を振りかざし、大きく踏み込む。肩先を斬られつつも、その刃の先は不逞浪士の脇腹を貫いた。

敵を貫いた刀を、新人隊士は離さない。身体を一層敵に押しつけて、相手の動きを僅かながらに制する。

その隙にもう一人の隊士が、大きく振りかぶった刀を振り下ろした。

刃は見事に浪士の脳天を割り、血しぶきをほとばしらせる。最初に突きを入れた新人隊士が慌てたように己の刀ごと体を引いたが間に合わず、血を浴びることになった。

「よくやった」

いつの間にか切り合いは終わっていたらしく、沖田が刀に付着している血を振り払いながら、呆然としている新人隊士の傍らに立った。

「そのうち奉行所同心がくるから、それまでは待機ね。死体を改めるまでは動けないんだ」

沖田は懷に入れてあった手拭いを、血に塗れた新人隊士らに無造作に放つてよこす。

肩を斬られた方の隊士は受け取ったその手拭いを器用に口で割いた。

ちよつとした傷の処置の仕方、訓練の一環として屯所で教わっているため、幸い深くはなかった肩の傷に、ぎこちない手つきで布を巻いていく。血に濡れた顔を拭い終えたもう一人の新人隊士が、それを手伝った。

ほかに傷を負った隊士たちも、それぞれ自分たちで適切な処理を行っている。見ると誰もが軽傷で済んでいて、隊士たちの中から死者は出ていないようだ。

そんな中で傷一つ、そして返り血すらも浴びていない沖田が、新人隊士の斬った、頭部の中身を晒している不逞浪士の死体をひよいと覗き込んだ。

「斬り口が、がたがただ。多分刀が歪んでいるね」

言われ、頭部を斬った隊士が手にした刀を持ち上げ、目の前にかざした。見ただけではよくわからず、鞘に刃を収めて確かめてみる。刀を収めるとき、手に妙な抵抗を覚えた。沖田の言う通り、恐らく頭蓋骨に刀が当たって歪んでしまったのだろう。

「明日、刀を直しに出しておいで。ところでどうだった、人を初めて切った感触は」

「何というか……刀が折れるかと思いました」

「私です」

新人隊士の言葉に、沖田は声を上げて笑った。常からよく笑う男

であるが、血にまみれた現場であつてもいつもと変わらぬ様子で笑うのかと、新人隊士はある意味感心する。

「そのうちに慣れるさ。それこそ豆腐でも切るように、人の身体もすつと斬れるようになるよ。慣れなければ死ぬだけだしね」

次はもう少しきれいに斬れるといいね、などと言っている沖田が斬った死体に近づいて見てみれば、切り口がきれいな一直線になっていた。骨まですぱりと斬っている。

素早く、均等の力で刃を走らせたならこういう切り口になるのかもしれないが、そんなことは誰でもできるものではない。

どうやればこんな風に斬れるのだろうか、としばらく斬り口を見ていたが、そこから覗く内臓に若干気分が悪くなってきたため、視線を逸らした。

脂肪と骨つて白いんだ……と初めて知った事実を呟きながら、二人並んで路地の端でしゃがみ込む。

今更恐怖がよみがえってきて、足が震えだしたのだ。

他の隊士たちが、今夜だけだぞという条件付きで、それを黙認してくれる。最初の斬りあいでは、こういう状態になる隊士も少なくないらしい。

「厳しい稽古の理由がわかった気がするな」

「ああ」

「でもあの稽古はやっぱ怖い」

「うん。斬られる恐怖と同じくらいに怖い」

こつそりとそんな囁きを交わし合い、沖田の方を伺い見た。

同心たちが来るまでは暇だねー、新手がくればもう少し楽しいのにねー、とにこやかに談笑している沖田の姿に、二人は同時に同じ呟きを零す。

「いい人……なんだよな、味方についていれば」

俳句

新撰組という組織が本格的に始動しはじめてからの土方は、日頃から何かと忙しい。

多摩にいた頃も、竹刀やら木刀を振り回したり、石田散薬の行商をしたり、稲の収穫の時期に人を使って効率よく作業を進める指示を出したりとある意味忙しく立ち回っていたのだが、自らが動いて身体を動かしていた昔と違い、いまは文机の前でもものを書き綴り、監察を走らせて情報を収集し、隊員の動向に目を配り、采配を振るう毎日だ。

すっかり忙しさの種類が全く変わってしまったな、と昔の仲間たちはいうのだが、土方自身はあまりそう思っていない。やっていることの根本は何も変わっていないつもりだ。

だが入れ物の形が変われば、その中に入っているものが昔から同じものだったのだとしても、傍から見ている者は中身までもが変わってしまったのだと考えがちだ。

実際、中身も変わってしまったのだと思わせるように振舞うときもある。

「……もしかしたら変わってないと思ってんのは俺だけで、多摩にいた頃とは全然違う自分になっちゃってるのかもしれないねえな」

妙な感傷に浸りそうになった土方は、ゆるく首を振った。いまはそんなことに頭を使っている場合ではない。

組織は生き物だ。常に変化するもので、問題は尽きることなく湧いてくる。それをどのように詰めていこうかと考えながら、土方は自室の障子を開く。

と、そこに何故か沖田の姿があった。まるで自分の部屋にいるように寛いでいる。

「美味しい饅頭屋を見つけたから、土産に買ってきたんですよ。一緒に食べましょう」

「食うのはいいが、勝手に部屋に入ってんな」

畳の上に転がっていた身体を起こしながらそんなことを言う沖田に文句をつけながら、土方はその向かいに腰を下ろした。

土方が帰ってくる時間を見越して用意していたのか、少し離れた場所に置かれている盆の上には、まだ湯気が立っている湯呑がふたつ乗っていた。

「入るのは百歩譲って許してもいいが、勝手に文机のものを漁るな。機密文書があったらどうするつもりだ。場合によっては斬らなきゃならなくなるんだぞ」

文机の書類がわずかに乱れているのを見咎めて、土方は沖田を睨みつける。

言っている言葉に嘘はないが、別の理由もあって文机に触れられなくなかった土方の表情には、若干の焦りが見えた。

案外と察しのいいところがある沖田が、それに気づかないわけがない。

にやりという風に唇をたゆませて、懷から出した半紙を土方の前でひらつかせた。

「これは機密文書になりますか？」

土方は悲鳴をあげそうになった。

朝方の時間があるときに、心の赴くままに浮かんだ句の案を書き記したものだ。

書類の下の方に隠しておいたのを、沖田は目ざとく気づき、勝手に読んだようである。

土方は自分の詠む句があまり巧くないのを知っている。だからあまり人には見せたくないし、句を詠んでいることも知られたくない。ましてやいま沖田の手の中にあるのは、草稿する段階にも達していない文字の羅列だ。

己を押し殺し、動揺を表に出さない術に長けている土方だったが、己の句に関する事柄についてはなかなか巧く動揺を隠せなかった。それに沖田の前では、彼の持つ雰囲気と昔馴染みという気安さか

ら、素を見せることが多い。

「お前なあ！」

顔に朱を上らせ、沖田を声高に怒鳴りつけた土方だったが、怒鳴られた本人は飄々とした顔をしている。

「そんな大声出さないで下さい。僕は結構好きですよ、土方さんの句」

「見え透いた世辞は好かん」

「世辞なんかじゃありません。朴直でわかりやすい句で、見ていてほつとします。でも他の人に見せない方がいいですね。土方さんの本質が知れてしまいますから。それは本意じゃないんでしょう？」

沖田の無邪気な物言いに、土方は苦笑いを漏らした。

照れくさいのと腹立たしいのと、そのほか様々な感情がないまぜになって、苦笑を浮かべるしかなかったのだ。

「そういえば土方さん、多摩に『豊玉発句集』は置いてきちやったんですよね。残念だなあ。僕、あれ読むの好きだったのに」

豊玉発句集というのは、土方が詠んだ歌をまとめて冊子状にしたものである。京に出る直前にまとめ上げ、実家に置いてきたのだ。

書いた句を人に見せた覚えはないのだが、いつの間にか置いてある場所が変わっていたりしたので、誰かしらが読んでいるのだろうと思っていたが、そのうちの一人が沖田だったらしい。

「『梅の花、一輪咲いても梅は梅』とか好きですよ。最後の頁に書いてあったから、京を出る直前に詠んだんですか。でも巻頭に書いてあった句の方が、多摩で最後に詠んだ句のような気がするんだよなあ……京に出るにあたっての覚悟が垣間見える気がして」

こめかみを指先で叩きながら視線を空に彷徨わせ、沖田はその句を諳んじた。

「『さしむかう 心は清き 水鏡』」

「……よく覚えてんな」

「全部諳んじれますよ。順番通りとはいきませんが。やってみましょうか？」

勘弁してくれ、と土方は頭を抱える。

沖田は理由のない嘘を吐くような人間ではないので、土方の句が好きだというのも、諳んじれるというのも、間違いなく真実なのだろう。

頭を抱えたまま、土方は沖田に命じた。

「おい総司。お前も一句詠め」

「え？ 無理です。一回も詠んだことありませんもん」

「男が無理とか簡単に言うな！ いいから詠め！ 俺がこれだけ恥をかかされたんだ、お前も恥をかけ！」

子供の癪癢のようだ。

だが土方がこんな風に感情を発露することは、今となってはとても難しい。副長という彼の立場や状況が許さないし、何より土方自身それが許さない。

沖田はそれが気に入らないらしく、こんな風にして土方に癪癢を起させようと画策しているきらいがあった。

「ええと……それじゃあ」

土方の気迫に、これは逃れられない——逃れるのは面倒くさそうだと考えたのか、沖田は饅頭を口に押し込みながら、天井をじっと見上げる。

沖田自身は気づいていないようだが、彼は幼い頃から何か思考を巡らせるとき、視線を必ず空へと巡らせた。

饅頭をふたつ食べ終える間、ずっと天井を睨みつけていた沖田は、ようやく視線を畳の上に戻す。

すっかり温くなった茶の入った湯呑を持ち、ぼそつと言葉を紡いだ。

「『動かねば、闇にへだつや 花と水』」

「……何だ、巧いじゃねえか」

予想を上回る出来の良さに、眉間にしわが寄る。

「適当に言ってみただけですよ。もし京に向かう直前に土方さんが『さしむかつ』の句を詠んだとしたら、そしてそのとき僕が隣にい

たとしたら、そういう返歌をしたかなあと思つて」

そして沖田は、饅頭と茶を、土方の前にずいっと突きつけた。その顔が少し赤いのは、自分で詠んだ句に対してあれこれ言われることが、恥ずかしかったのだろう。

少しはこつちの気持ちを知りやがれ、と思いながら、土方は饅頭を口に運んだ。

甘いものはあまり好きではないのだが、沖田が買ってくる饅頭はそれを理解しているからか、甘みが強くないものが多い。

うめえな、と思いながらふたつめを口に運んだときだった。

「そうだ。京から多摩に送った荷に添えたつていう、『報国の心を忘るる婦人哉』は別の意味で最高だと思います」

ぶつと口に含んでいた饅頭を吹く。

「土方さんにもそういう洒落気があつたんだなあ。微笑ましい気持ちになります。女にもって仕方がない、困りものだとか言いながら、もらった恋文の束を実家に送るなんてねえ」

「総司！」

動揺した土方の膝が湯呑をひっくり返したのを見て、沖田は腹を抱えて爆笑した。

壬生寺

先程から部屋の前を、何度も何度も、一人の隊士が行き交っている。

足音と気配を殺そうとしているようだが、斎藤からすればまったく殺し切れておらず、その隊士が妙に焦っている様子なまで筒抜けだった。

読んでいた本を閉じると、斎藤は腰を上げて障子を引いた。ちょうど部屋の前を通り過ぎたその背中に、おいと声をかける。

「何かあったのか」

斎藤が自室にいらっしゃると思っていなかったのか、その隊士は文字通り飛び上がって驚いた。くると身体ごと斎藤の方へ向き直り、腰を折るようにして頭を下げる。

「斎藤組長！ すいません、せつかくの非番なのに、お邪魔してしまつて」

「それは構わない。それよりもどうした」

「いえ、あの、」

見ればその隊士は一番隊の者だった。

隊服をまとい、襷を掛け、鉢金を額に巻いているところを見ると、そろそろ巡察の時間なのだろう。しかし、ならばなぜ彼は庭や門に集うわけでもなく、あちらこちらをうろつき回っているのか。

疑念はすぐにとある確証へと変わった。

「……いないんだな」

「はい。まだ時間はあるのですが、屯所内にいる気配がないのが気になつて」

じきに巡察に出なければならぬ刻限だというのに、一番隊組長たる沖田が見つからないのだという。

組長がいなければ、巡察には出られない。

「あいつは、あれだけ副長に怒られたのに、懲りてないのか」

実は沖田が巡察の時間になっても姿を現さないのは、初めての事ではなかった。彼は何度か、巡察の時間を若干過ぎた頃合いにやってきたという前科持ちなのだ。

そのたびに誰かしらが、組長としての意識が云々、示しがどうのこうのと説教をするのだが、沖田はしらつとした顔で「うちの隊士たちはみんな優秀だから、僕がいなくても大丈夫ですよ」などと返したものだ。

それが土方の耳に入り、一刻ほど説教を食らっていたのはつい先日のことだったような気がするのだが。

斎藤は深いため息をひとつ零すと、隊士の肩をぽんと叩いた。

「心当たりがあるから、俺が連れて来よう。一番隊士たちは各々支度を整え、すぐに出られるように準備しておけ」

「はい。よろしく願います」

斎藤は沖田の部屋に立ち寄って彼の不在を確認し、必要なものをいくつか手に取ると、そのまま庭から裏口へと回って屯所から出る。向かう先は、このすぐ傍にある寺だった。

近づくにつれ、子供のはしゃぐ声に重なるようにして、妙な歌が聞こえてくる。

親亀、子亀、孫亀……と訳の分からない歌を調子外れに歌うその声には、十分すぎるほど心当たりがあった。

「総司」

背中に小さな子供を二人乗せたまま、境内の片隅にある石に腰かけて歌っていた沖田は、斎藤の声に顔をあげる。先程の歌からしてどうやら子亀、孫亀らしい子供たちも、斎藤の方を見つめてきた。

その表情はとても楽しげだ。斎藤には理解できないこの遊びが、子供たちにとっては堪らなく面白いものらしい。

「そろそろ一番組の巡察の時間だろう。準備が終わりそうなのに、肝心の組長がいないと、一番組の隊士が嘆いていたぞ」

「わ、もうそんな時間になったんだ。ごめんね、もう仕事に戻らなくちゃ」

子供たちは少し不満そうな顔をしたが、仕事という言葉にしぶしぶという風に沖田の背中から降りる。

そして、そーちゃんがいないならつまんないし別のところで遊ぼうと子供は手を取り合つて、そのまま駆けて行つた。

聞き分けがいい子供だなとか、そーちゃんと呼ばれているのかとか、いろいろなことを考えながらも表情には出さず、斎藤は沖田の頭にはさりと羽織を落とした。沖田の部屋から持ち出してきた、彼の羽織だ。その上に鉢金も落としてやると、ごつ、と鈍い音を立てる。

痛い、とぼやいた沖田の声は聞こえなかったことにした。

「遊んでいないで、ちゃんと仕事をしろ」

「業務に支障が出るようなさばり方はしていないよ。今だって、なんていうのかな、隙間の時間にこうして息抜きしてるだけで」

「いや、支障が出ているだろうが。第一これでは隊士たちに示しがつかないだろう」

斎藤の言うような言葉はもう何度も、それこそ耳に蛸ができるほど聞かされているのだろう。沖田はただ笑いながら、斎藤が持つてきてくれた羽織をひっかけ、額あてを巻いた。

そしてしゅる、と襷をかけながら、笑い交じりの声で言う。

「そういえばねえ、最近妙なのがこの辺りを嗅ぎまわっているの、知ってる？ 子供たちが言っていたんだ。変なお侍さんがこの辺りをこそこそうつろつについていて気持ち悪い、って。しかもうちの隊士に接触しているみたいなんだよねえ。もう監察の方が把握済みかもしれないけど、一応土方さんの耳に入れておいてよ」

少なくとも斎藤は、その話を知らなかった。

もしかしたら監察の山崎あたりなら知っているのかもしれないが、いま聞いた話は土方の耳にすぐに入れておこうと思った。

不逞浪士がうつろついているのはともかく、隊士と接触している気配があるというのは不穏だ。

そしてふと気づく。

「そういえば多摩にいたときのあんたは、そんなに子供が好きでもなかったな」

多摩で近藤が試衛館の主をしていたとき、斎藤も一時世話になったことがあった。

近所の子供が稽古に来たり、ただ遊びに来たりとしていたが、当時の沖田は子供が寄つてくれば愛想よく相手をしていたようだが、自ら子供を構いにいくことはなかったような覚えがある。

寺で子供とただ遊んでいるだけだと思っていたのだが、実は子供を通してしか見られない世界をこうして覗き見し、新選組にとって有益になる情報を集めていたのか。

それを問いただそうとした斎藤だが、少し考えてやめた。聞いたところで真剣に答えが返ってくるようには思えなかったのだ。

「別にいまも子供が好きっていうわけでもないよ。でも子供の面白さには目覚めたみたい。子供って面白いね、あけすけで」

沖田は屯所の方を指さしながら、その『面白い』話の一端を斎藤に聞かせる。

「土方さんに惚れちゃった女の子がいるんだけどさ、『あの人は案外と繊細な人だと思う』なんて言ってたんだよ。案外敏いよねえ。

あと井上さんのことを、おじいちゃん呼ばわりしたりしてたっけ。

あの人、おじいちゃんって歳じゃないんだけど、やけに穏やかで落ち着いて見えるからそんな風に言われちゃったのかな」

そして沖田の指先が、つと斎藤の方に向けられた。

「斎藤のことは、仏様みたいな人だつて言ってたっけ。あと、僕のこと。ほんと面白いよねえ、」

く、と沖田の唇がたゆむ。

普段から笑みを浮かべているような穏やかな顔立ちをしている沖田だが、たまにこうした少し皮肉げというか、人の悪い笑みを浮かべることがあった。

「新撰組の鬼だつて言われている僕たちが、よりにもよって仏様なんでさ——さて、いい加減行かないとまずいかな」

じゃあ行ってくるね、と子供にするように手を振って、沖田は屯所の方へ駆けていった。

ひとり壬生寺に取りこのされた斎藤は、沖田が座っていた石に腰を下ろし、空を見上げる。

自分が仏のようだと言われたのは、恐らく風貌のせいだろう。表情の読めないこの顔は、どうやら人によっては仏の彫り物のように見えたりもするらしい。

沖田は、常に浮かんでいる穏やかな笑みから、仏を連想したのだろうか。

それとも子供たちは、土方の本質を見抜いたようにして、沖田の本質の欠片も見抜いたのだろうか。

そうだとしたら……

「子供とは、恐ろしいものだな」

斎藤が思わず零した呟きは誰の耳に届くこともなく、木々の間に溶けて消えていった。

暗殺任務

襖越しに、声がする。

沖田は柱に背を預けるようにして座り込みながら、隣室から漏れ聞こえてくる言葉に耳を傾けていた。

土方が近藤の部屋に入るのを見て、こっそりと隣室に――近藤の部屋の隣は、土方の部屋だ――忍び込んだのだが、人の気配に獣並みに敏いはずの土方も近藤も、沖田が隣室にいることには全く気付かないようだ。

「――土方さんの言うことは、いつも難しいや」

会津が薩摩が攘夷が……と語る土方と近藤の話は、半分も理解できない。

だが、沖田にとって世情やら思想などはどうでもいいことだ。ただ彼らと、彼らが築き上げたこの新撰組を護ることだけが大事で、それだけを理解していればいい。

目を閉じて、半分うつらうつらしながらも、沖田は隣から漏れ聞こえる声に一応注意を払い続けた。

そして、

「だからあいつは殺らなくちゃならねえ。だが新撰組が手をかけたことは絶対に知られるわけにはいかない。なんせ会津藩とも深く関わりがある人物だからな……いろいろと面倒なことになる」

ようやく沖田にとって理解する必要がある言葉が、土方の口から零れ落ちた。

閉じていた目がぱつと開き、飛びかけていた意識も一気に鮮明になる。

「――割ける人員は精々二名。しかもよほど信頼できるやつでない駄目だ」

「しかし歳。相手は相当の手練れ、しかも暗殺を警戒してかひとりで出歩くことはないんだろう。そんなやつを相手にできる、信頼で

きる奴と言え……」

「総司と斎藤だな。しかし斎藤は今回使えねえ……別の用事を頼んでるんでな」

斎藤を使わないのは、それだけの理由ではないはずだ。

沖田の推測だが、どうも彼は会津藩と深く関わりのある人間ではないかと思う。恐らく土方も同じように考えているから、今回の暗殺対象者に係らせまいとしているのだろう。

彼の新撰組に対する想いは恐らく本物であるが、会津藩に対する忠義もまた本物。

だからこそ、土方は斎藤をこの任務に就かせない。

「今回は俺と永倉で行こうと考え……」

「土方さん、僕が行きますよ。僕ならひとりで十分です」

沖田は鞘に納めたままの刀で、隣室とを隔てていた襖をすつと押し開いた。

隣室に沖田が潜んでいたことにまったく気づいていなかったふたりは、びくりと肩を震わせて驚きをあらわにする。近藤は座したその姿勢のままだったが、襖により近い位置に座っていた土方の右手は、刀にかけられていた。

抜く前に沖田の姿を認めたため、刀は鞘から抜かれることはなかったが、これがもし沖田ではなく一般隊士だったり侵入者だったら、白刃が空気とともに相手を切り捨てていただろう。

「総司……お前、俺と歳の話を、盗み聞きしてたのか」

沖田の姿に、近藤が困ったような顔をし、土方は罰の悪そうな顔をふいつと逸らした。

「屯所に戻ってきたときに見た土方さんの様子がいつもと違ったから、なにか面白い話でも聞けるのかと思って」

悪戯を成功させた子供のように笑い、沖田は身体をすりと室内に滑り込ませると、後ろ手で襖を閉める。

そして姿勢を正して座ると、まっすぐに二人を見据えて告げた。

「他の誰よりも、僕は上手く人を斬れます」

だからこそ、沖田は一番隊組長となったのだ。

沖田が歳若いのにもかかわらず、十ある隊の中で『一番』という特別な隊を預かったのには理由がある。

一番隊組長及び隊員は、通常の任務のほかに、隊員の肅清や介錯、少人数での暗殺業務などの請け負うことが多かった。

剣の腕が立ち、また強靱な精神力を持っている者、いまはまだ未熟ともいずれそれだけのものを持ち得る、と期待される者が集うのが一番隊だ。

それを取りまとめる組長は、そうなると沖田しかないというのが隊編成を決めた時の幹部たちの意見だったらしい。

沖田自身も、そんな隊を預かれるのは自分しかない、と思った。「僕が行きます。いいですね」

「……お前にばかり、汚れ仕事をさせるのもどうかと思ったんだが」土方が額に手を当てて、ため息をつく。

その言葉にちよつと笑ってしまいそうになった。一番の汚れ役を自ら買って出ているはずの男が、真剣な顔をしてそんなことを言うのかと。

「別に僕自身は汚れ仕事と思っていませんよ。たと思っていたとしても、それは一番隊組長として当然負うべき重圧でしょう？」

「ああ……そうだな、その通りだ」

土方は居住まいを正して近藤へ視線を送り、それを受けた近藤が無言でひとつ頷く。

これで話は纏まった。

「総司、お前に暗殺任務を命じる。詳細は後日追って知らせるので、いつでも対応できるよう準備をしておけ」

正式に命令が下ったのは、それから三日後の事だった。

対象者の風貌、待ち伏せる場所を聞き、沖田は夜も更けてからこ

っそりと屯所を抜け出す。

小袖姿に刀を帯び、隊服はふろしきに包んで小脇に抱えていた。ダンダラ羽織はとにかく目立つので、暗殺の際には羽織らないのが普通なのだが、沖田は状況さえ許せば仕事をする直前に隊服を身にまとう。

決して相手を逃さないことと、現場の状況を把握して適切な判断の元で羽織に腕を通すことを条件にして、しぶしぶではあるが近藤と土方も許可をくれた。

暗殺するために監察が選んだ場所は、人氣が全くない竹林だ。夜空に浮かんでいる細い月明かりは、笹の葉に所々遮られている。

沖田は羽織を身にまとうと、路の傍らに添えられている地蔵の傍に腰を下ろした。ここならば、路を歩いてくる者が手に下げた提灯の灯がすぐに目に入る。そして相手からは地蔵の陰になって、沖田の姿に気づくことはできない。

刀の柄に手を添えた体勢のまま、やることのない沖田はぼんやりと思考を巡らせた。

一人で請け負った暗殺任務のとき、沖田はなぜか必ず初めて人を斬ったときのことを思い出す。

畳や藁ではなく、人を初めて斬ったのは、京の町に来てからだ。そのときも暗殺で、闇にまぎれるようにして近藤とふたりで人を斬った。

その数日前、初めて人を斬ったときのことを土方に聞いていたのだが、そのとき土方はこう言っていた。

——刃が肉を断ち、骨にぶつかる感触が刀を通して伝わってきて、ちよっと気持ち悪かったな。物と人とはこうも違うのかと、驚きもした。

だが実際人を斬った沖田は、土方とは違った意味で驚いた。

まるで豆腐でも切ったかのように刃は人間の身体にすっと吸い込まれ、骨までを断ったのだ。

また、初めて人を斬ったときは少なからず動揺を覚えるとも言わ

れていたのだが、沖田の場合、人を斬るために鯉口を切った瞬間は心が高揚したものの、斬り終わったあとは驚くほど心が凪いでいた。落ち着いて刀の血を懷紙で清めている沖田を見て、近藤は驚いていたものだ。

多分自分には、人を斬る才能があるのだと思う。

だからこの才能を、近藤と土方のために——新撰組のために使いたくなった。

新撰組という組織に人のかたちを与えたとしたら、近藤は「心」、土方は「頭脳」だ。ならば自分は手足となり、「刀」を握ろうと決めた。

「……来たか」

人の気配に、地蔵の陰から道の様子をうかがうと、提灯の灯りが揺れているのが見える。

沖田は刀に手をかけた。この刀は、いつ触れても掌にひやりとした感触を伝えてきて、その温度が沖田に冷静さを与えてくれる。

人の気配はますます近づき、彼らの話す声が耳にはっきりと届く距離までに来た。相手はまだ、沖田の存在には気づいていない。

提灯を持って先を歩く男が一人、その後ろに並んで歩く男が二人、さらに後ろにもう一人。

人数と立ち位置、そして各々の顔を確認した沖田はざっと土を擦りながら路へと出た。

「！」

誰だ、と声を上げようとした男たちだが、沖田が身に纏う羽織を見てすぐにその正体を察し、腰の刀に手をかける。

無駄口を叩かず、最善の対処をするあたりは大したものだ——と思いつながら、沖田は鯉口を切った。

「新撰組一番隊組長、沖田総司」

名乗りながら、ずっと先頭に立つ男の懷へと飛び込んでいく。

「悪いが誰一人、生かして帰しはしない」

左右から沖田に斬りかかろうと考えたのか、二人の男が並んだと

ころを、一刀で斬った。返す刀で、もうひとりを斬り捨てる。

一呼吸する間の出来事だ。沖田の剣戟の速さに、誰もついては来られなかった。

最後に残ったひとり、突きで仕留めた。

誰一人声すらも出せず、四人の男立ちは血の海に沈む。

「——いい子だね」

沖田は、愛おしげに血塗れた刀を撫でた。

細身で美しい沖田の愛刀は、刃こぼれひとつしていなかった。刀身を血に濡らして、鈍い光を湛えている。

「さて、と」

この場所ならば夜明けまでこの惨劇は明るみに出ることはないだろうが、一刻も早くこの場所から立ち去らなければならない。

羽織を脱ぎ捨て、それで手の中にある赤い月を拭いた沖田は、自分だけの月を鞘のなかに隠すと、そのまま踵を返した。

そしてあとに残ったのは、夜天の月が微かに照らし出す、四つの死体だけだった。

菓子

人と会った帰り道、小腹が空いたので何か食べてから屯所に帰ろうと思った藤堂は、気に入りの店が連なる通りをひとりで歩いていた。

蕎麦にしようか、寿司にしようか、いやでもあちらの天麩羅も美味そうだ。

空腹だというのに、いやだからこそ目移りしてしまっただけか。

こういうときは、最初に食すつもりでいたものを選ぶが吉だ。

確か最初、自分は蕎麦を食べるつもりだった。ならば決まりだ――蕎麦にしよう。

ようやく食べるものを決めた藤堂が、馴染みの蕎麦屋へ足を向けたようにしたそのときである。

「おや、藤堂じゃないか」

知った声が藤堂の名前を呼んだ。

団子屋の軒先で、背中を丸めるようにして団子食べている男が、にこにこ手を振っていた。

「やあ、沖田じゃないか」

彼の姿を認めた瞬間、蕎麦屋という選択肢が消えた。

藤堂もまた沖田に手を振り、彼の方へと小走りに駆け寄る。確か一番組は夜の巡察が入っていたはずだ。ということはいまこの時間は、自由時間ということだろう。

一日に数刻与えられる自由時間を、沖田は大抵子供と遊んだり菓子屋に足を運んだり、他の隊士たちとは少しばかり違った時間の過ごし方をした。

この男の風変わりなところが、藤堂は結構好きだ。

沖田の傍らには数枚の皿が積み上げられていた。背が大きな男だけあって、彼はとにかくよく食べるのだ。

「一緒にしてもいいか？」

尋ねる言葉を言い切らぬうちに、沖田の隣にすんと腰を落とす。しかし沖田は気にした様子もなく、串に刺さった団子をふたつ一気に頬張り、頬を膨らませながら不明瞭な声で言った。

「この店は汁粉がお勧めだよ」

「ん？ ああ……京の汁粉もうまいと思うが、ここだけの話、舌触りがあまり好きじゃないんだ」

周囲の客や店員に気を使い、声は潜めた。

江戸の汁粉は粒餡の汁に餅が入っているが、京の汁粉は漉し餡から作つたらしい汁に餅が入っている。

どちらもうまいが、藤堂はやはり食べ慣れている江戸風の汁粉が好きだった。

「江戸と京では、食べ物ひとつとっても色々違うよね。こっちの食べ物もうまいけど、食べ慣れた江戸の食事もあるかな」

京の食を思い切り堪能している風の沖田でも、そんな風に思うようだ。

店員を呼んだ藤堂は団子を注文し、沖田も饅頭を追加で注文した。まだ食べる気なのか、と重ねられた皿の枚数に、驚きを通り越して笑いが零れる。

「藤堂は今日、非番だったっけ」

「ああ。友人に会ってきたんだ。飯を食べながら話をしていたんだが、議論が白熱して、結局食べる方がおろそかになっちゃった」

尊攘派寄りの考えを持っている藤堂は、新撰組内ではあまり自分の思想について語らない——新選組は佐幕寄りの立場にあるからだ。だが新撰組は、個々の思想を表立って抑圧するわけではない。山南も永倉も佐幕派ではないが、新選組の幹部に名を連ねている。

——いまのところは。

「藤堂も永倉さんも、ふたりとも猪突猛進って感じの気性なのに、そういう論議とかが好きなんだね。僕は難しい話なんかより、食べる方が好きだけど」

それでよく土方さんに叱られるんだけどねー、と笑いながら、沖田は手にした饅頭を一口で頬張った。結構大ぶりの饅頭だというのに、よく口が裂けないものだ。

沖田の慕う近藤は、酔っぱらうと己の握り拳を口の中に入れてみせる、という奇妙な――言葉を換えれば愛嬌のある行動に出るのだが、まさか沖田はいずれその技を会得するつもりでいるのだろうか、と藤堂は不安になる。

「もうちよつと沖田は菓子を味わって食べた方がいいと思うぞ……近藤さんみたいな大口になりたいと思つてやつてるなら、別だが」「ん？　ちゃんと味わってるけど？」

指先についた饅頭の皮を舐め取った沖田は、しかし藤堂の言葉に思う事でもあつたのか、次に手に取った饅頭は端っこを齧るようにして食した。

まるでネズミのような食べ方をしている沖田の横顔を見つめながら、藤堂は自分も団子を齧り……そして思い切つて口を開く。

「土方さんが話すことは、難しすぎてよく分かんないって言うんだけどさ」

少し硬い声音になった藤堂の様子に、沖田が饅頭を齧る手を止めた。

「でも本当は沖田、わかるんだよ。土方さんの話も、近藤さんの話も、山南さんの話だって。ちゃんと思考すれば、わかるはずなんだ――なのに何だつて馬鹿の振りをするのか、俺にはいつも不思議に思つてる」

「藤堂は面白いことを言うなあ」

ふ、と笑つて、沖田はそれだけ言つた。

それ以上なにも言わない沖田に焦れて、藤堂はさらに言葉を続ける。

「これから先、この国がどうなるかとか、本当に一度も考えたことがないのか？」

「ないね」

「近藤さんと土方さんについていっただけだ、っていつも言っているけど、もしもあの二人が道を誤ったらどうする？ いや、それはないとしても、近藤さんと土方さんが道を分かつ日が来たら、お前はとうするんだ？」

新撰組内が最近、少しざわついていることに、沖田も気づいているはずだ。

最初は些細なことだと思っていた思想の違いが、ここにきて人間関係に少しずつ亀裂を生み出している。

藤堂は思うのだ――試衛館時代の仲間たちですら、いつかばらばらになってしまうのではないかと。

この場所から自分もいつか出ていく未来が、そう遠くないうちに来るのではないかと。

近藤・土方の名前に、沖田はふつと表情をなくした。

沖田の無表情と言うのは、日常ではあまり見ることがないので大変珍しい。

それだけ藤堂の言葉は、沖田を動揺させたのだろうか。

「心配してくれてるんだね、ありがとう」

しばらくの間の後にそう言葉を発した沖田の顔には、笑みが浮かんでいた。眉がハの字になった、困ったような笑みだ。

「でも君が信じている道があるように、僕にも信じる道がある」

すると突然沖田が、皿の上に転がっていた団子の串を手に取り、それを藤堂の額に押し当てた。

鋭い先端が、ゆるく額を圧迫する。

新撰組内でも五指に入るほどの優れた剣客、と言われている藤堂だったが、沖田の串をよけることが出来なかった。

額にあたった感触で、ようやくいま自分は生死を握られているのだと気づいた始末だ。

「そしてその道を歩み続ける覚悟もある」

だからこれ以上は何も言わず、という気迫を感じる。

生唾を飲み込み、藤堂は両手を挙げた。了解した、という意味の

その所作を正しく理解した沖田は、何事もなかったように串を引く。そして穏やかな口調で言葉を綴った。

「僕、敵は容赦なく斬り捨てるけど、信念を持って命をかけて向かってくる人間は、嫌いじゃないよ。うん、ある意味尊敬している。

芹沢さんも——」

ずつと片手に持ったままだった饅頭を口に放り込んで咀嚼してから、沖田は言葉を続ける。

「近藤さんと土方さんに大概なことをしてくれたけど、あの人はあの人で、己の信念を持った人だったよ。そして周りにどう思われようと、決してその信念は揺るがなかった。そういうところは好ましかったな」

考えや信念が違い、いつか道が分かれたとしても、そしてそれによって互いが殺し合い状況になったとしても、藤堂がゆるぎない信念を持っているのならそれは評価し、そして尊敬もする——と言ってくれているようだ。

「じゃあ巡察の準備もあるし、僕は先に行くよ」

「ああ」

「今度はお互い非番の時、何か食べに行こう。難しい話は抜きでね」
「そうだな。楽しみにしている」

ひら、と手を振って、沖田は雑踏のなかに身を投じた。人よりも頭ひとつ分以上大きな沖田の姿は、人に埋もれることはない。

藤堂は沖田が道の角を曲がるまで、その後ろ姿を見送った。

そしてその姿が完全に己の視界から消えると、はあっ、と深いため息を吐いた——自己嫌悪のため息だ。

もしも自分がこの新撰組を去るときが訪れるのだとしたら、そのとき沖田も一緒に来てくれたら嬉しいと思っていた。彼の剣の腕も、人柄も、藤堂は尊敬していたし好ましく思っていたから。

だが、

「そうだよな……冷静になってみたら、私の言葉に乗って着いてくる沖田なんて、沖田じゃないか」

温くなってしまった茶をすすり、藤堂は力なくそんなことを呟いた。

少しばかり、思想やら世情とやらが邪魔くさいものに思えてしまったが、藤堂は慌ててそれに蓋をする。

串に残っていた団子を頬張り、藤堂はそれと一緒にもやもやとしたものを、身体の奥深くへと流し込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8065q/>

花浅葱

2011年5月8日11時40分発行